

平成22年5月6日現在

研究種目： 基盤研究 (B)  
研究期間： 2007 ~ 2010  
課題番号： 19330154  
研究課題名 (和文)  
学校力に着目した心の健康と発達支援の方略  
研究課題名 (英文)  
Designing and Evaluating Mental Health Promotion Programs for Schools  
Focusing on School Empowerment  
研究代表者 青木 紀久代 (AOKI KIKUYO)  
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授  
研究者番号： 10254129

研究代表者の専門分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：学校メンタルヘルス、コミュニティアプローチ、食育、アウトリーチプログラム、学校力

## 1. 研究計画の概要

本研究は、「学校力」に着目した児童・生徒の心の健康と発達支援を行うために効果的な包括的アセスメントと支援プランを提言するアクションリサーチである。研究代表者が開発したメンタルヘルスのアセスメントツールを活用し、学級、学校、地方自治体と協働して実践を行う。その実践を通して、以下の6つの研究課題を実施する。

- (1)学校における心理臨床的支援に役立つ学校力の同定
- (2)小・中学生を対象としたメンタルヘルスと学校力の包括的アセスメントの開発
- (3)アセスメントツールの国際比較調査による文化的側面の検討
- (4)学年・学校カンファレンスシステムの構築と実践評価
- (5)心の健康授業及び食育等の実践と評価
- (6)心の健康と発達支援の実践モデルの提案

## 2. 研究の進捗状況

## (1)2007年度

①**予防的介入方略の検討**：食育に着目した心の健康教育プログラムを実践。対象は小学5年生1クラス、5ヶ月間。

②**危機的介入方略の検討**：メンタルヘルスのアセスメントツールを活用し、支援実践を拡大するために、複数校の校長・養護教諭を対象とし、モデル校の事例を取り上げて模擬カンファレンスを実施し、カンファレンスシステムのあり方を提案した。

③**「学校力」の同定**：教育課程論と発達臨床論からの文献検討のもと、学校力の構成要

素を抽出した。

## (2)2008年度

①**アセスメントツールの活用**：アセスメントツールを用いて、地域レベルでのメンタルヘルスと食に関する調査を実施。対象は、小学校5校、中学校2校。実践の中間評価で、摂食障害傾向の低下、共同体の自尊感情の増加が見られた。

②**継続プログラムの実践**：食育に着目した心の健康教育プログラムの2年目の実践と評価を行った。対象は、昨年度実施クラスを含めた6年生2クラス。児童参加型の授業を行い、児童自身の食生活の見直しや家族・友人との会話の増加が見られた。また、新たな小学5年生2クラスにおいて、昨年度と同様のプログラムを実施し、クロスオーバーデザインによるプログラムの効果を検証した。

## (3)2009年度

①**継続プログラムの実践**：食育に着目した心の健康教育プログラムの3年目の実践と評価を行った。対象は中学1年生110名、プログラムの内容は過去・現在・未来の食卓の風景についての授業と課題作文、学習発表である。事後評価では、生徒とその保護者に食態度の向上が確認された。

②**学校力アセスメントシート活用の検討**：初年度に抽出した「学校力」に関する構成要素をもとに、学校における援助資源のアセスメントシートを作成し、臨床的な活用可能性を探索した。アセスメントシートを利用することで、学校力を一定の観察視点から短期間

で把握することができ、効果的な児童生徒の支援方法や、介入ポイントを効率的に見いだせることが示唆された。

③**児童生徒のメンタルヘルスの国際比較**：韓国と日本の韓国人学校の中学生 1～3 年生 2072 名にメンタルヘルスの調査を実施した。韓国の中学生は、摂食障害傾向が特に高いこと、日本の韓国人学校の中学生は、韓国の中学生とは異なる文化意識を持つことなど、韓国・日本双方の学校支援に有用な知見が得られた。

### 3. 現在までの達成度

#### ②おおむね順調に進展している

現在までに研究課題(1)～(5)について、予定していたほとんどの調査・実践を終えている。毎年の実践協力校へのフィードバックの積み上げから、現地の協力体制が確立され、実践上のトラブルが少なく、計画に基づく研究の推進が可能となったと思われる。中間成果発表を現地の教育委員会と共同して開催した。

### 4. 今後の研究の推進方策

今年度は、国際比較データの分析と、実践したプログラムの包括的な評価を行う。合わせて、学会発表ならびに国際シンポジウムの開催などを通して、成果の発信を行っていく。

また今後は、最終年度に提案していく学校独自の子どもの心を育む力、すなわち「学校力」を生かした心の発達支援プログラムの汎用可能性を模索したい。そのためには、これまで開発してきた一連のプログラム内容を基盤に、学校や地域の特徴を加味してカスタマイズする方法を精緻化することが求められる。今後もより多くの学校や自治体と協働し、実践研究を推進していく予定である。

### 5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計 22 件)

- ① 井梅由美子、青木紀久代、中学生の対象関係と精神的健康、心理臨床学研究、27(6)、738-743、2010、査読有
- ② 青木紀久代、学校でできる子どものメンタルヘルスのトータルサポート、大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要、27、1-9、2010、査読無
- ③ 伊藤亜矢子、学校・学校組織へのコンサルテーション、教育心理学年報、48、192-202、2009、査読有
- ④ 富士原紀絵、行って意味ある学力調査の要件を考える、教育、768、78-85、2010、査読無
- ⑤ 青木紀久代、壺井尚子、朝日香栄、食育と心の教育—QOL の評価を巡って—、家庭教育研究紀要、30、85-93、2008、査読有

〔学会発表〕(計 29 件)

- ① 具 英姫、青木紀久代、日本在住韓国人中学生の心の健康と韓国人意識との関連、日本学校保健学会第 56 大会、2009 年 11 月 29 日、沖縄県立看護大学
- ② 壺井尚子、青木紀久代、朝日香栄、小学校における食と心の教育実践(1)—家庭科における食育の試み—、日本学校保健学会第 55 回大会、2008 年 11 月 14 日、愛知学院大学
- ③ 青木紀久代、学校をエンパワーする実践研究—ツールの活用を通して—、日本心理臨床学会第 27 回大会、2008 年 9 月 5 日、つくば国際会議場
- ④ Aoki, K. Designing and Evaluating Mental Prevention Programs for Schools in East Asia: Toward an Integrative Framework and Initial Evidence. The 4<sup>th</sup> Japan-Korea Seminar in Community Psychology, (20080126), Seoul Korea, Yonsei University
- ⑤ Aoki, K. Child Support System and Child Abuse Prevention: Situation in Japan and the Comparison with UK. Symposium” Child Abuse Prevention in Britain” (20071109), Children’s Rainbow Center, Kanagawa

〔図書〕(計 14 件)

- ① 青木紀久代、新星出版社、臨床心理学、2010、223 頁
- ② 青木紀久代、ぎょうせい、親のメンタルヘルス—新たな子育て時代を生き抜く—、2009、205 頁
- ③ 青木紀久代、神宮英夫、新星出版社、心理学、2008、221 頁
- ④ 青木紀久代、みらい、発達心理学—子どもの発達と子育て支援—、2007、208 頁
- ⑤ 酒井朗・青木紀久代・菅原ますみ、金子書房 子どもの発達危機の理解と支援 金子書房、2007、208 頁

〔その他〕

- ① 児童心理 2008 年 1 月号より一年間 (12 回) 連載『学校でできる子どものメンタルヘルス・サポート』
- ② 四国新聞 2009 年 1 月 25 日(日)掲載『食育を通じて心の健康を一家族が喜ぶ献立づくり』
- ③ 香川県小豆島郡土庄町教育委員会 HP に成果の一部を掲載  
<http://www.town.tonosho.kagawa.jp/annai/kyoikusoumu.htm>
- ④ NHK 首都圏ネットワーク 2007 年 11 月 27 日『子どもの心の健康に』